「元初まりの話」に登場する動物たち（８）

「み」について ③

おやさと研究所教授
佐藤　孝則　*Takanori Sato*

前号で、「元初まりの話」に登場する“み”は白蛇で「水蛇」、すなわち「スナヤツメ」だと結論づけた（図１）。そして江戸時代から明治時代にかけての大和地方では、「八ツ目鰻」は「スナヤツメ」を指し、一般庶民にも身近な生き物として親しまれていたと紹介した。ただ江戸時代において、「夜盲症」に効くということで漢方薬として珍重された「八ツ目鰻」は「カワヤツメ」だったことは周知のことで、姿形もほとんど同じで大きさだけが小型の「スナヤツメ」と、明確に区別していたかどうかは不明である。むしろ区別していなかったのではないかと考える。大和盆地の方言からみても、「スナヤツメ」のことを上市や王寺地区では「八ツ目鰻」、小川地区では「八ツ目」と呼んでいたことからも類推できる。

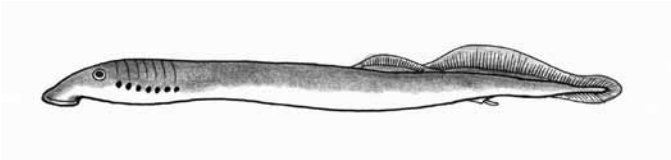

図１．スナヤツメの成魚。口は丸く下に向き、頭部側面には７個の袋状の鰓がある。

いずれにおいても、教祖はなぜ「み」という表現を通して、女雛型の「理」の話を私たちに教示されたのであろうか。そのことに言及する前に、「スナヤツメ」について生物学的視点からいくつか紹介する。

「八つ目鰻」の形態・生態

ヤツメウナギは、姿形を見てもわかるように、ウナギ（鰻）に似ており、ドジョウ（泥鰌）にも似ている。しかしウナギやドジョウとは、進化史的に全く異なった進化過程を経ている。ヤツメウナギは脊椎動物の中では最も下等な無顎類（円口類）に属し、ウナギやドジョウが軟骨魚類を経て硬骨魚類へと高次に進化したグループに属している点で、全く異なっている。

またヤツメウナギは、今から５億年前に祖先が誕生し、２億５千万年前以降は、現在とほぼ同じ形態になった「生きた化石」である。３億５千万年前から形態を変えないシーラカンスや、２億年前から形態を変えないカブトガニと同じようなレリック（遺存種）と考えてよい。むしろ、ヤツメウナギは硬骨魚類のシーラカンスよりもより進化的に下等な形態を残す初期の脊椎動物で、脊椎動物そのものの誕生過程を「幼生」の成長過程の中に残す珍しい動物である。

ヤツメウナギの口は頭部の下面（腹面）にあり（図１）、顎を持たず、口と舌には表皮性の角質歯がある（図２）。二つの背びれと尾びれをもち、鼻孔は頭部背面に開いているが口には通じていない。また左右の側面に袋状の鰓（えら）が７対あり（図１）、硬骨魚類のような胸びれと腹びれはもたない。

ヤツメウナギの卵の大きさは直径約１mmで、孵化すると「アンモシーテス」と呼ばれる幼生になる。この幼生は、形態的にも生態的にも成魚とは異なる特徴をもつ。口は頭部の前面にあり、吸盤状にはなっていない。歯はなく、眼も皮下に埋没していて外界を見ることはできない。体内には、成魚にはない内柱（ないちゅう）と呼ぶ繊毛を有した器官があり、この器官を通って餌となる珪藻類やデトリタス（木の葉などが分解された有機物）は消化管へ送られる。この採餌方法は、系統学的には脊椎動物の神経組織を単純化したような構造をもつ無脊椎動物のナメクジウオと、同じ採餌様式である。

図２．カワヤツメの口。口は吸盤状で顎をもたない。
（撮影：稗田一俊氏。『日本動物大百科』（1998年）より）

卵から孵化した「アンモシーテス幼生」は、全長15～20cmの成魚に至るまでの数年間、無脊椎動物のナメクジウオと同じ成長過程を経て成魚となるのである。

上述したように、ナメクジウオは脊椎動物の進化の起源を明らかにする重要な動物であり、ヤツメウナギは無脊椎動物が脊椎動物へと進化したときの最初の脊椎動物と考えられている。

すなわち、人類へと進化する最も原初的脊椎動物が、ヤツメウナギなのである。

“み”である「スナヤツメ」の現状

奈良県はスナヤツメを、『大切にしたい奈良県の野生動物～奈良県版レッドデータブック～』（2006年）の中で、「河川改修、護岸工事などの影響により、産卵および幼生期の生息環境の分断、減少が生じ、個体数が減少した。特に、奈良盆地内の河川における近年の確認記録はない」として、「絶滅危惧種」に指定している。環境省も、ほぼ同じランクの「絶滅危惧Ⅱ類」に指定している。

激減している理由は、河川改修や護岸工事によってスナヤツメの産卵床となる上・中流域の砂礫底が破壊され消失したこと、またたとえ産卵が成功したとしても、孵化した「アンモシーテス幼生」の生息環境が著しく破壊されていること、さらには森林環境の悪化に伴う水系上・中流域の河川環境そのものが破壊されてきたこと、等々が考えられる。この現状が続けば、個体群の再生産および生息環境の崩壊、ならびにスナヤツメの絶滅は、火を見るよりも明らかである。

この現状を見る限り、「女雛型」すなわち“み”と呼ばれる「スナヤツメ」が「絶滅危惧Ⅱ類」や「絶滅危惧種」に指定されているように、危機的状況にあるのは明らかである。ちなみに、「男雛型」すなわち“うを”と呼ばれる「カスミサンショウウオ」（畑ドジョウ）においても、環境省では「絶滅危惧Ⅱ類」に、奈良県では「絶滅寸前種」に指定されている。さらに奈良県では、県内に分布するドジョウのうち、「ナガレホトケドジョウ」が「絶滅寸前種」に、「アジメドジョウ」が「絶滅危惧種」に、「ホトケドジョウ」が「情報不足種」に指定されている。このように現状は厳しい状況にある。

以上のように、「元初まりの話」に登場する“どぢよ”や、「男雛型」の“うを”、「女雛型」の“み”が極めて危機的状況にあることを、私たちは「世界は鏡」としてしっかり心におさめるべき重要な時期を迎えていると考える。